

平成 22 年 4 月 23 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008 年度～2009 年度

課題番号：20730541

研究課題名（和文） 「大学教育とキャリア」関係の日本的形成メカニズム

研究課題名（英文） The relations between learning at university and career in Japan

研究代表者

濱中 淳子 (HAMANAKA JUNKO)

研究者番号：00361600

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、大学教育とキャリアとの関係を実証的に描き出すことである。具体的な対象として経済学部卒業生を取り上げて質問紙調査を実施し、大学時代の過ごし方と現在の学習状況、そして社会経済的地位との関係について、過去に実施した工学系卒業生への調査結果と比較しつつ分析した。そのうえで「大学教育が役に立たない」という言説がなぜ生み出されているのかについて検討を加えている。

研究成果の概要（英文）：This project examines the relationships between learning at university and career after graduation. We analyze the private economic effect of education based on a survey of graduates from the department of economics, and discuss the reason why it is often said that the university education is not so important for the career in Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：大学教育，キャリア，レリバンス，卒業生調査，質問紙調査

1. 研究開始当初の背景

大学教育とキャリアの関係はどう理解されるべきか。大学教育のレリバンスはどこにあるのか。高等教育が大衆化し、専門分野と卒業後の仕事とのリンクがみえにくくなった日本において、これは政策選択の土台としなければならない基本的な問題である。にもかかわらず、この問題に対する解はいまだ見

出せておらず、それどころか根拠のない「大学教育無用論」が飛び交っているのが現状であろう。

申請者は、こうした状況の打破に重要な手がかりを与えてくれるのが、自ら関わってきた研究プロジェクトの到達点である「学び習慣仮説」だと考える。この仮説は、「大学時代の学習経験は現在のキャリアに直接的な

影響は与えないが、現在の学習経験を經由することによって、間接的にキャリアに影響を及ぼしている」というものであり、2004～2006年に5大学の工学系卒業生を対象に実施した質問紙調査の分析結果から導き出したものである（その詳細は、矢野真和，2009「教育と労働と社会—教育効果の視点から」『日本労働研究雑誌』No.588，5-15頁を参照のこと）。日本の「大学教育とキャリア」関係の形成メカニズムが、このいわば「柔らかな」仮説から描き出される可能性は十分にあるのではないか。工学系から他の領域にまで対象を広げた場合、「学び習慣仮説」による大学教育のレリバンスの説明はどの程度まで可能となるのか。本研究が注目したいのは、この問いである。

2. 研究の目的

上述のように「学び習慣仮説」は実証分析から生まれたものではあるが、これを「大学教育とキャリア」関係の全体像にまで結びつけるためには、対象を工学系から文系にまでも広げた、さらなる検証を行う必要がある。文系の知識・能力は、工学系のそれに比べて曖昧であり、事実、文系こそが大学教育無用論のおもな発信源となっている。文系大卒者の検討も行わなければ、得られた知見に強い社会的意義を与えることはできない。そこで、本研究では、文系のなかでも最も規模が大きい経済学部を具体的な対象として取り上げ、工学系調査との比較をしつつ、その実態を明らかにしていくことにしたい。

なお、今回の分析では、大学教育のレリバンスについて、卒業生本人の「認識レベル」にまで踏み込んだ吟味も試みたいと考えている。卒業生たちは、どの程度大学教育が役に立っていると感じているのか。逆に、誰が大学教育を役に立っていると感じているのか。その状況を「学び習慣仮説」の文脈で捉えると、どのように表現されるのか。この点について検討を加えることにしたい。

3. 研究の方法

本研究は、

- A. 経済学部卒業生調査の実施・分析
 - B. 工学系卒業生調査の分析の継続
 - C. 両者の比較
- の3つから構成される。

今回新たに実施した経済学部卒業生調査について、もう少し仔細に説明すれば、質問項目は、次の3つの柱からなっている。この調査枠組みは、以前に実施した工学系卒業生調査と基本的に同じものである。

(1) 大学時代の教育に対する「意欲」や「関心」、および「卒業時における知識能力の獲

得」についての自己評価。

(2) 仕事への「意欲」や「関心」および「現在の知識能力の獲得」状況などについての自己評価。

(3) 現在の仕事のアウトプットとして、「所得」「職位」「仕事満足度」「業績」などを取り上げ、現状とそれについての自己評価。

なお、この調査枠組みの意図を簡略化すれば、「学生時代の経験(1)が仕事のアウトプット(3)に与える効果」および「現在の仕事ぶり(2)が仕事のアウトプット(3)に与える効果」を解明することである。つまり、「(1)→(3)」ならびに「(2)→(3)」の因果関係に焦点をあてている。

そして、このような枠組みで設計した調査を、以下のように2回に分けて実施した。

【1回目】いくつかの大学の経済学部で調査協力を依頼したところ、1つの大学から協力を得ることができた。そこで、平成20年12月～平成21年1月に対象学部の担当者と相談しながら質問紙調査を設計し、2月に調査対象者の選定（卒業生リストからランダムサンプリングで3,000名）、3月に調査を実施した。回収された回答数は596、回収率は19.9%だった。

【2回目】住民基本台帳をベースに作成した膨大な調査モニターを保有する調査会社に調査協力を依頼し、そのモニターから経済・経営学部の卒業生をスクリーニング、平成20年度に試みたものとほぼ同じ内容の調査を平成21年4月にWEB上で実施した。594の回答を得ている。

4. 研究成果

(1) はじめに、工学系卒業生調査データについて、学習経験の効果を、とりわけ読書経験に着目しながらさらに検討を加えた結果、次の点が浮き彫りとなった。

- ① 現在のどのような読書経験が所得の向上効果をもたらしているかについて探ったところ、いくつかの効果を抽出することができた。とりわけ、一見、読書とは関係が薄そうに思える「技術者」として働いている者にも幅広いジャンルにおける読書の所得向上効果がみられたことは注目された。
- ② その技術者の読書効果だが、専門書ではなく、むしろ歴史小説やビジネス書といったジャンルに見出すことが出来た。とはいえ、専門書に意味がないというわけではなく、「大学時代に専門書をよく読み、現在ビジネス書をよく読んでいる

者」にもっとも大きな効果が認められる。大学時代から続く学習の習慣が功を奏しているとも考えられるし、専門知識を獲得したうえでのビジネス知識という相乗効果によって所得が高まっているとも解釈できる。

(2) こうした工学系の「学び習慣」の実態を踏まうえで、経済学部卒の卒業生調査データを分析したところ、次のようなことがみえてきた（ただし、以下の結果は、調査1回目である1大学の卒業生に実施したデータのみを用いて分析したものである）。

- ① まず、「大学時代に獲得した（卒業時における）知識能力」と「現在の知識能力」、および「大学時代の読書経験」と「現在の読書経験」の2つをそれぞれ独立した変数として扱い、所得との因果関係を重回帰分析によって探ると、「現在」に関する変数のほうにプラスの効果、他方で「大学時代」に関する変数にはマイナスの効果を確認された（表1）。現在の経験のほうが重要で、大学時代はむしろ頑張らないほうが良いと読める結果である。

表1 分析結果（1）

従属変数：所得を対数変換したもの

	獲得した知識能力	読書経験
定数	5.383 **	6.177 **
大学時代	-0.037 **	-0.021 *
現在	0.061 **	0.029 **
調整済みR ²	0.176	0.020

- ② けれども、こうした解釈は妥当とはいえない。というのは、「大学時代の経験」と「現在の経験」とのあいだに無視することができない関係があるからだ。所得向上効果を検討するには、「大学時代の経験」と「現在の経験」を独立して扱うのではなく、「大学時代の経験→現在の経験→所得」というパス図を設定する必要がある。そして、このパス図を用いてデータ分析した結果が図1になる。工学系卒業生の調査データのみならず、経済学部の卒業生調査データからも、「大学時代の学びが現在の学びに結びつき、それが所得（社会経済的地位）を向上させる」というつながり＝「学び習慣」の構図が認められた。
- ③ ただし、工学系卒業生調査の結果と経済学部卒業生調査の結果とを比較すると、

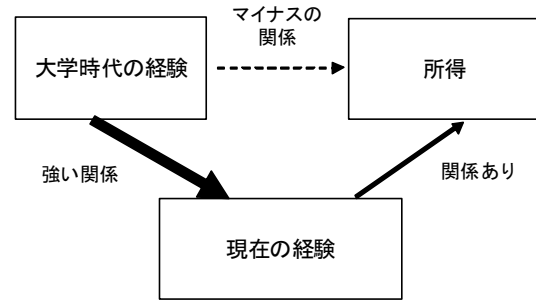


図1 分析結果（2）

工学系卒業生にとっての「大学時代の経験」のほうが、所得向上により大きな効果を与えていた。知識能力指標を用いたパス分析結果を簡単に紹介すると、工学系の場合、「大学時代」の効果の大きさは「現在」の効果の約3分の1。他方で、経済学部の場合、「大学時代」の効果の大きさは「現在」の効果の約8分の1になる。効果の連鎖は、工学系のほうが強固である。

- ④ また、読書の効果についても検討を加えてみたが、経済学部卒業生に工学系卒業生の分析で得られたような「大学時代と現在との組み合わせによる大きな効果」というものは見出しにくかった。経済学部の場合、たとえば「大学時代に専門書を読んでいたわけではないが、現在ビジネス書を読んでいる者」にみられる所得向上効果のほうが、「大学時代に専門書を読み、現在ビジネス書を読んでいる者」にみられる効果よりも大きなものになっている。
- ⑤ 以上のような実態が関係してのことだろう、工学系に比べて大学教育への評価が低くなっている。調査では、大学時代の経験それぞれについて、役に立っていると感じている度合いを10点満点で評価してもらっている。そのデータをみると、大学時代の学習に関する評価は、一般教養以外のすべての経験において「工学系卒業生の得点>経済学部卒業生の得点」という関係が確認される。なお、サークルやアルバイトに対する項目については、それとは逆の「工学系卒業生の得点<経済学部卒業生の得点」という関係が認められた。

平成22年度以降も、経済学部卒業生調査ならびに工学系卒業生調査のデータを引き続き分析し、結果がまとまり次第、論文とし

て発表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 濱中淳子、新しい技術者像を探る 工学系卒業生のキャリア形成(下) 工学系卒業生の誰が「優れたマネージャー」になるのか、産学官連携ジャーナル(WEBジャーナル)、独立行政法人科学技術振興機構、査読無、2008年6月号、2008
- ② 濱中淳子、新しい技術者像を探る 工学系卒業生のキャリア形成(中) 技術者にとっての読書、産学官連携ジャーナル(WEBジャーナル)、独立行政法人科学技術振興機構、査読無、2008年5月号、2008
- ③ 濱中淳子、新しい技術者像を探る 工学系卒業生のキャリア形成(上) 大学時代の過ごし方と技術者の地位、産学官連携ジャーナル(WEBジャーナル)、独立行政法人科学技術振興機構、査読無、2008年4月号、2008

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

濱中淳子、東洋館出版社、大学院改革の社会学—工学系の教育機能を検証する、2009、189

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

濱中 淳子 (HAMANAKA JUNKO)

独立行政法人大学入試センター・研究開発部・助教

研究者番号：00361600

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし